体が繊細で小花の数も少ない事，又護穎の先端に短芒が認められ，型も長楕円状披針形である事等の点で容易に区別出来る。又 *Foa macrocalyx* の群と混同されていた点もあるので，相違点を一応記しておいた。

○ 牧野先生のヤナギバヒメジョオン（津山　尚）　Takasi TUYAMA: Dr. Makino's *Erigeron pseudoannuus*

ヒメジョオン類の本場である北米の温帯にはヒメジョオン *E. annuus* Pers. と *E. strigosus* Muhl. (=*E. ramosus* BSP.) が広く分布している。前者は湿った肥沃な土地を好み，後者は乾いた肥沃でない土地を好み，自から住み分けが起っている。これらが帰化した日本でも同様で，例えば東京附近では前者が新開地の住居，田畑，河川敷，丘の麓などの附近のやや低地に多く，後者は低い丘陵の上などに群生している。後者にはまだ和名がなかったので，かつてヘラバヒメジョオンと命名した。しかし今は生育の場所からオカヒメジョオンの方がより適切であると思っている。北米においてはこの2種の間に時に交雑が起り（おそらく何段階にも），色々の form を生じ，おのおのが単為的に繁殖して形態的に固定した apomictic forms を生じている。日本でも同様でこれらの group は生態要求が異るのにつれて異った環境に住んでいる。これらは原産地から輸入されたものもあろうし，日本で生れたものもあろう。小生は東京を中心に6種の明かな group を区別し，おのおのに仮に命名した（ヒメジョオンの多型性について，1–3 報　資源研彙報 **17–18**, 1950; **23**, 1951, お茶の水女子大科報 **1**, 1951)。この group の1つがヤナギバヒメジョオン *E. pseudoannuus* Makino=(*E. annuus* var. *pseudoannuus* Makino mss.) である。これは牧野先生によって本誌 **6**–1: 欧文 5, 1929 で発表され，更に同 **6**–10, pl. 4 に和文のノートが加えられた。当時はまだヘラバヒメジョオン（以下ヘラバと略称）は帰化していなかったが，ヤナギバはこれとは異ると正しく指摘されている。所が先生は後にヤナギバはヘラバそのものであると訂正された（植物混混録 **3**: 50, 1947)。これは一応ヤナギバの範囲を拡大されたともとれるが，小生は寧ろその後帰化して来たヘラバと混同されたものと想像している。ヘラバは母種の一つであり，ヤナギバは apomictic form であり，形態的にもはっきり区別がつき，中間がないから，このあつかいには賛成し難い。ヤナギバはヒメジョオンの次に早く帰化したものらしく，東大には 1880 年の標本があり，ヒメジョオンに次いで広い分布域を持ち，例えば東北，北陸などでは山間部にまで見られる。

ヘラバとヤナギバの区別点は次のようである。ヘラバは葉身の上半部が最も巾広くいわゆるヘラ形をしているが，ヤナギバの方は葉身が狭披針形で先端は細く尖り，葉縁は波状に上下し，更に裏側にまいている。ヤナギバは一般に分枝性が強く，しばしば茎の中央部の葉腋からも短縮した側枝が出ていて小形の葉を叢生している。ヤナギバの方が体の表面の毛の数がより少なく，その伏し方もより少い。冬期のロゼットでは両方の区別が一層容易で，ヤナキバの方に葉身が小形で細く，緑色及びこれを彩る紅紫色が濃い。ヤナギバはヘラバと異ってやや低湿な所，田畑の附近，人臭い所などに生える。牧野植物図鑑のヤナギバはヘラバである。牧野先生の野外植物図譜 **1**: 79 対頁のヤナギバはヘラバかまたは他の apomictic form のミドリヒメジョオンであろうが，この写真では判定が難しい。しかしヤナギバでないことは明かである。　（お茶の水女子大）